

## 実践例; 7歳男児 小児科外来で低身長の検査の場面

簡易版ケアモデル	具体的な実践内容	子ども・家族の反応
<p>(説明時/検査・処置時に) 親が付き添うか否かは、子ども・親の希望にそって決めている</p>	<p>① 普段は点滴刺入時に、親は待合で待ってもらうため左記を母親に伝えた。</p> <p>③ 本人の希望により、母親に「では、そばにいて一緒にお願いします」子どもに「がんばろうね」と伝えた。</p>	<p>② 子どもが「嫌だ、お母さんと一緒じゃないと点滴しない」と言った。</p> <p>母親「仕方ないね。一緒にいてあげるから、がんばりなさい」と言った。</p>
<p>(親がいても親とは別に) 子どもの目の高さで、検査・処置の目的・内容(方法/手順)を子どもに説明している</p>	<p>「点滴を入れて、ここからお薬を入れた後に、ここ(三方活栓)から血液を採って検査するからね。この時は、針を刺さないから痛くないからね。点滴を入れる時だけ注射するから頑張ってるね」と説明した。</p>	<p>子どもはうなずいた。</p>
<p>子どもが「イヤだ」と抵抗し始めた場合、ヤル気になるタイミングを待っている</p>	<p>④ 子どもが処置台に上がり前腕を出すまで待つ。</p> <p>「そうだね、嫌だね。検査どうする？ 今日がんばって、病院に来てくれたんだよね。朝ごはんも食べずに来てくれたんだからがんばろうね。」</p> <p>医師も子どもの声を聞き、処置室に来て「さあ、頑張ろうよ」と声をかけた。</p>	<p>⑤ 「嫌だ。嫌だ。しないで」と言って処置室から走って飛び出して行ったり、母親にしがみついたりする。(3~4回繰り返す)</p> <p>母親は「私は検査しなさいと言ってないでしょ。⑥ 自分が検査したい。点滴やるって言って来たんだから、さっさとしなさい。」と子どもに話した。</p> <p>⑦ 子どもは「検査やる」と言ってベッドへ上がると、母親が子どもの前腕を持ち、看護師の前に出した。</p>
<p>子どもが恐怖感を感じないような工夫をしている</p>	<p>母親がそばにいることを実感するように安心感をもたらすような声かけを行う。</p> <p>子どもに「お母さんに手を握ってもらっておこうね。やる時はこれからやるって言うからね。」と伝えた。</p>	<p>子どもはうなずいた。</p>

簡易版ケアモデル	具体的な実践内容	子ども・家族の反応
<p>検査・処置の進行に合わせて、順々に説明したり声かけしたりしている</p> <p>子どもが言ったり聞いたりしたことに、適切に答えている</p> <p>子どもが泣いても押えつけずに、他の方法で対処している</p>	<p>⑧<u>身体の動きが激しかったため医師も含め3人で体と腕を押さえた。</u></p> <p>「これから針を刺すよ」「針が入ったからね。これから点滴をつなげるから、もう少し動かないでね。」</p> <p>「テープを固定するからね」と進行に合わせて声をかけた。</p> <p>子どもに頑張りの声かけを行っていった。</p> <p>⑩「よく頑張っているよ、すごいね」と伝えていった。</p>	<p>⑨子どもは「痛い」と言いながら、手足をバタバタさせ、起き上がろうとするが、留置針を刺すと動かすことはなかった。</p>
<p>検査・処置が終わったことを、ことばで伝えている</p> <p>子どもの頑張りを褒めている</p> <p>親に対して、子どもが頑張ったことをほめるように働きかけている</p>	<p>点滴終了後、これからの検査について伝えた。</p> <p>「これから採血を行います。その後30分ごとに2時間後まで採血を行います。終了するのが12時頃の予定です。」と母親に伝えた。</p>	<p>子どもは「お腹がすいた。早くしてよ」と言った。</p> <p>⑪検査中子どもは笑顔で過ごしていた。</p>
<p>「ご心配でしたね」と親の気持ちをねぎらっている</p> <p>子どもの検査・処置後の反応を確認している</p> <p>検査・処置後、これから守るべき注意事項を、説明している</p>	<p>2時間後「終わりです」と伝えた。</p> <p>「これで検査は終わりました。食事していただいてよいです。」</p> <p>「よく頑張ったね。頑張ってくれたから終わったよ。」と母親と子どもに伝えた。</p>	<p>子どもは「やっと食べれる」と言い、笑顔になった。</p>

### <看護師が振り返った内容>

子どもは処置台上がって前腕を出したが、処置をしようとしたらベッドから飛び降り、それを3~4回ほど繰り返した。

いつまで待っても処置ができないだろうと考え、最後は医師を含めて3人で体と腕を押さえた。

他にも良い方法はあったのだろうか、今振り返ってもわからないが、検査中は笑顔で過ごせていたことと、検査を受けられないことで必要な治療ができないリスクを避けることができたため、強制的に処置を行ったが行動はよかっただろうと考える。

## 事例に対するコメント

### 下線①～③

この小児科外来では、普段は母親を同席させないで処置を行っているということでしたが、子どもの希望を聞いて母親の協力を得て処置を行うことにしたということです。「子どもと親の要望を聞いて親が付き添うか否かを決める」ことがスタッフ全員に定着することが課題だと思います。

### 下線④～⑦

④子どもの希望に添うよう“子どもの覚悟を待つ”という看護師(医療者)の姿勢は、子どもに対して真摯に向き合っているメッセージにもなっていたと思います。しかし、子どもは点滴を嫌がり、⑤のように処置台へ上がってもいざ処置が始まる時には処置室から飛び出してしまうことを繰り返していますが、⑥⑦の子ども自身が「点滴やる」「検査やる」といって検査に対して前向きな思いをもって行動した様子も見逃さずに記入されています。

この事例を報告した方に確認したところ、これまでの関わりの中で、根底には子ども自身が「背を高くしたい」という気持ちをもってることが考えられるとのことでした。したがって、この場合は、子どもの自発性を尊重し、子どもが処置に臨む覚悟ができるのを最大限まで待つ関わりとなっていたと考えます。

### 下線⑧～⑪

子ども自身もやらなければならないことはわかっていたと思いますが、なかなか踏ん切りがつかない状況は、痛みを伴う処置の場面で多々遭遇する光景だと思います。

⑧のように最終的には3人がかりで押さえるということになってしまいましたが、別の見方もできるのではないかと思います。「子どもが処置台に上がり前腕を出すまで待つ」ことは子どもの主体的な力を尊重する関わりとして重要です。しかし、子どもの発達段階や過去に痛みのある処置を受けた経験によっては、待ってもできないことが多いと思います。善行として行った「押さえる」という行為は、処置を受けることになかなか踏み切れない発達段階の子どもの覚悟を後押しする関わりであったり、安全に処置を速やかに行って心身の負担を最小限にすることだったり解釈できるのではないのでしょうか。

子どもが「どうしても動いてしまうので手を押さえてやるよ」、「危なかったから手を押さえてやったんだよ」などと事前または事後に抑制する(した)ことを子どもに伝えることで子どもの納得を得ることができるとは思いません。

⑨点滴針の刺入後には動かない子どもの様子が見られており、⑩で動かないで頑張っている子どもの行動を支持する看護師の声かけができていました。

振り返りの内容として、⑪「検査中は笑顔で過ごせていた」という子どもの様子から「背を高くしたい」という子どもの要望を叶えるための検査が行えたことから、「強制的に処置を行ったが行動はよかっただろうと考える。」と書かれています。「強制的」とマイナスな表現がされていますが、子どもにとってどういう意味があったのか今一度考えてみる必要があると思います。「押さえる=強制的」と捉えてしまっていますが、先の下線⑧でも述べたように、「押さえる」ことを善行として事前または事後に伝えて実施することによって、子どもがいかに納得して取り組めたのかということが重要ではないかと思います。また、「じっとしてできる」ことが看護師目線の目標にならないように、子ども自身の目標は何かを考えるPatient-Centered Careを実践することが必要だと思います。

検査・処置の看護師目線の目標  
子どもがじっとして検査できること?

子ども自身の目標へ  
検査を受けて低身長の治療を受けること

看護実践で本来大事にすべきこと、目指すものは何かを考えることが必要  
Patient-Centered Careを实践すること